

**Abstract****A Morphosyntactic Approach to Resultatives  
in Japanese and Labeling Algorithms in Minimalist Syntax**

Hideya Takahashi

This paper is an attempt to provide a morphosyntactic analysis of resultative constructions in Japanese within the current Minimalist framework proposed in Chomsky (2008). Specifically, we argue that resultatives in Japanese are not to be analyzed as predicates, in spite of the tradition in the literature; rather, they are morphologically, as well as functionally, adverbial modifiers, which is considered to be valid in light of the fact that Japanese is an agglutinative language. In particular, we first argue for Mihara's (2008) proposal that Japanese resultatives are to be divided into two types (PPs and APs), and then propose that the syntactic and semantic differences between them can be given a natural and unified account in terms of the application of labeling algorithms on External Merge. We show in the second half of this paper that the proposed adverbial analysis of Japanese resultatives has an additional empirical advantage in that it can correctly predict various facts which emerge from the comparison of English and Japanese resultatives, including those which would even be mysterious under previous analyses, solely based on the apparent structural parallelism between the two languages.

**Keywords: resultatives, adverbials, complex predicates, labeling algorithms**

## 日本語における「派生的」結果構文の形態統語論について

高橋 英也

## A Morphosyntactic Approach to Resultatives in Japanese and Labeling Algorithms in Minimalist Syntax

Hideya Takahashi

## 1. はじめに

結果構文 (resultative constructions) とは、単一の節内で原因と結果の因果関係について表現する言語形式である<sup>1</sup>。例えば、英語の典型的な例である (1) と (2) において、原因となる行為や事態は、他動詞文で表され、その結果状態を付加詞的な形容詞句 (AP) や前置詞句 (PP) が二次述語として叙述する。

- (1) a. John painted the fence white.  
 b. John broke the vase into pieces.  
 c. John pounded the metal flat.  
 (2) a. The pond froze solid.  
 b. John danced himself tired.

(1a) においては、ジョンがフェンスを塗るという行為が原因となってフェンスが白くなるという結果状態がもたらされる。同様に、(1c) においては、ジョンが金属を叩くことによる金属の形状変化が表されている。また、(2b) における動詞 dance は通常は目的語を従えない非能格動詞 (unergative verb) であるが、主語と同一指示の再帰代名詞を目的語として伴い、結果句による叙述を可能にしている<sup>2</sup>。このような事例は、現象の記述的側面と、その分析における説明的側面の奥深さから、先行研究において多くの興味を喚起してきた。例えば、構文文法の立場に従えば、英語においては、いわゆる S + V + O + AP/PP といった統語形式は、因果関係といった意味が張り付いた「構文」と見ることが出来る。また、語彙意味論的立場においては、動詞が内在的に因果関係を示す達成 (accomplishment) の意味を持ち、AP/PP がその結果状態の詳細を行う場合や、AP/PP が動詞の表す非有界的行为の有界点を定める「アスペクト転換」の役割を果たしている場合に成り立つ、「合成的な」表現形式と広く想定されている。さらに、伝統的には Simpson (1983) 以来、直接目的語制約や非対格性仮説などの統語的接近法も見られる。

このような様々な接近法の優劣に関して、英語におけるいわゆる中核データは多くを語らないが、他言語 (例えば日本語) に目を転じてみると、かなり違った景色が見えてくる。上の (1) と (2) に対応した次の日本語の例を考えてみたい。

- (3) a. ジョンはフェンスを真っ白に塗った<sup>3</sup>.  
 b. ジョンは花瓶を粉々に割った.  
 c. \*ジョンは金属を平らに叩いた<sup>4</sup>.  
 (4) a. 池がカチカチに凍った.  
 b. \*ジョンは自分をクタクタに踊らせた<sup>5</sup>.

ここでは、英語の場合とは異なる明確な文法性の対比が見られる。すなわち、動詞自体が一定の状態変化

を含意する場合は、結果句はその詳細を指定する役割で生起することが可能だが、非有界的な行為を表す活動動詞と結果句は共起できない。先行研究において、この対立は「本来的」結果構文と「派生的」結果構文と呼ばれてきた<sup>6</sup>。そして、日英語に見られるこの対比から、英語においては、結果句の導入による有界点の「継ぎ足し」が可能であるのに対して、日本語においては動詞本来のAspect性が二次述語によって転換されることがなく、内在的に結果状態を含意する達成動詞のみが結果構文を形成すると理解されてきた。

しかし、事実がそれほど単純ではないことは次の例から分かる。まず第一に、日本語において派生的結果構文が全く不可能なわけではない。次の例を見られたい。

- (5) a. 「肉に塩胡椒を振ってしばらく置いたら、次に(それを)平らに叩いて下さい。」  
 b. 「せっかくきれいにセットしたんだから、ペチャンコに叩かないでよ！」  
 c. 太郎は次郎の背中をアザだらけに殴った。

これらの例において、本来的に有界点を持たない活動動詞「叩く」「殴る」が「に」句と共起することでAspect転換を受けていることは、次の(6)で確認できる。

- (6) a. 5分で / \*5分間、肉を平らに叩いて下さい。  
 b. 5分間 / \*5分で、肉を叩いて下さい。

第二に、そもそも、日本語に達成動詞が存在するかはいささか疑問である。次の例が示すように、達成動詞として分析される動詞は、基本的に活動動詞としての振る舞いも示し、状態変化は必ずしも含意されない。

- (7) a. この花瓶を割ったのに割れなかった。  
 b. この靴はいくら磨いてもきれいにならない。  
 c. この肉はいくら煮ても柔らかくならない。

さらに、小野(2007)が指摘するように、日本語の結果構文における完結性はあまり強いとは言い難い。

- (8) a. ウェイターはテーブルを2分の間(きれいに)拭いた。  
 b. 彼は納屋を一日中ペンキで(赤く)塗った。  
 c. 父は何時間もの間床を(ピカピカに)磨いた。  
 (小野(2007: 23))

これらの事実から、(i) 結果句が行為の有界点を導入し派生的結果構文が形成される場合がある一方で、(ii) そもそも、「本来的」と分析されてきた結果構文においては、必ずしも結果状態への到達が含意されるわけではないという、一見矛盾した状況が単一言語内で両立していることが分かる<sup>7</sup>。(5)の事例については、4節で論じるように、決して生産的と言い難く、かなり厳しい語用論的条件の下でのみ成立する。したがって、先行研究においてはほとんど論じられることがなかった、いわば「例外的」事例である。核と周縁の関係性に関して、周縁的事象を捨象して中核部分の説明に対して有効な規則性を維持することは、理論研究においてしばしば見られる研究姿勢である。しかし、いかなる言語理論においても、ある言語形式が「原理的に」形成可能であること(もしくは不可能であること)を保証する何らかのメカニズムは必要である。その点で先行研究を見てみると、いずれの接近法においても、このような周辺的事例を含んだ包括性を求

めるためには、何らかのアドホックな規定が必要になってしまう。

本論では、このような「本来的」対「派生的」という対立に基づく結果構文に関する日英語の対照研究に疑問を呈し、結果構文に対する新たなパラダイムを提起する。特に、加藤(2007)や井本(2009)や宮腰(2009)らの立場を踏襲し、日本語における結果句と呼ばれてきたものは、実は述語的要素ではなく、動詞の行為を修飾する副詞類として分析されるべきであると主張する。そして、三原(2008)で論じられている形容動詞の分類と、Chomsky(2008)における統語構造構築に関する原理の相互作用から、日本語における結果句の示す諸特徴が自然に導出されることを示す。そして、膠着性と叙述関係の形成という日英語間の根本的な類型論的差異に着目し、日本語においては複合述語形成という英語とは異なった生産的な様式で結果句の認可がなされることを論じる。

## 2. 問題の所在

### 2.1. 日本語における結果句とは

通言語的比較において、分析対象とする言語形式を形態的・意味的に同定することは大きな問題であり、したがって当該言語の品詞論といった難しい問題が生じることもしばしばある<sup>8</sup>。この問題は、次の(9)における下線部の言語形式を、(10)における英語の結果句に相当すると論じる際にも顕在化する。

(9) a. 太郎は壁を白く塗った。

b. 太郎は窓ガラスを粉々に割った。

(10) a. Taro painted the wall white.

b. Taro broke the window into pieces.

まず、対応する英語(10a, b)との意味的比較から、「白く」「粉々に」はそれぞれ目的語の結果状態を記述する結果句と見なすことができる。ここで、英語の結果句がAPもしくはPPであることは明らかであるが、日本語においてはどうか。「白く」は形容詞のク形として、「粉々に」は形容動詞の二形とされることが一般的だが、これらの連用形は形態的に副詞と区別できない。このような事実から、仁田(2002)のように「結果の副詞」という副詞の下位分類を設定する立場や、日本語の結果句を副詞と見なす分析は少なくない。それに対して、例えば、影山(2001)では結果句と結果状態の副詞を区別し、後者を結果構文から排除している<sup>9</sup>。少なくとも、結果句と副詞の関係について、Washio(1997)以降に、意味論的また類型論的に多くの研究成果が蓄積されてきたが、形態統語論的な側面に踏み込むことによってその問題に接近した研究は管見では見当たらない<sup>10 11</sup>。

このような現状を踏まえ、本論では、日本語における結果構文の諸特性を結果句の形態統語論に関する精査から自然に導出することを試みる。同時に、日本語の結果句が副詞であることを改めて主張する。ここで、日本語の結果構文を定式化する上で解決すべき問題の所在が明確になる。次の(11)を見られたい。

(11) a. 日本語の結果句が副詞的でありながら同時に述語的であるのは何故か。

b. 日本語の結果句の認可には、どのような形態統語論的過程が関与しているのか。

日本語の結果句は、形態的に副詞と同形であると同時に、目的語の結果状態を叙述する二次述語としての機能も示す。この二面的な性質は、例えば次のような例を観察すると明らかになる。

(12) 花子は乱暴に電話を切った。

(12)において、副詞「乱暴に」は、花子の電話を切る行為を修飾する様態の副詞であるのみで、花子の状

態を叙述はしない<sup>12</sup>。そのことは、「が、花子は乱暴な人間ではない」といった文脈を無理なく後続させられることから分かる。これは、様態の副詞と結果句としての解釈が多義的である(13)と対立的である。

(13) 花子はテーブルをきれいに磨いた。

「きれいに」は、様態の解釈が可能なることから明らかなように、副詞としての性質を示すが、同時にテーブルの状態を叙述する結果句としても解釈可能である。

(11)の問いに答えを与えるために、まず、三原(2008)の議論を踏襲し、従来形容動詞の二形と扱われていた語彙を2種類に分類し、それらの間に見られる非対称性について観察する。その後、日本語の結果句の形態統語的特性について3節で考察する。

## 2.2. 結果句に見られる非対称性

三原(2008)は、伝統的に形容動詞(もしくは、ナ形容詞)と呼ばれる範疇に属する語を、それに名詞が前接する際の接続形によって「な」形容動詞と「の」形容動詞の2つのクラスに分類できると論じている。次の(14)と(15)を見られたい。

(14) 粉々の/\*な花瓶, 半熟の/\*な卵, ぺちゃんこの/\*な空き缶

(15) きれいな/\*の部屋, 平らな/\*のうどん粉, 濃厚な/\*のお茶

三原によると、(14)の類に属する形容動詞は、意味的に極点を示すものに限定されているが、(15)のような形容動詞はスケールを内包する意味構造を持つ<sup>13</sup>。語彙によって多少の出入りはあるが、次の例が示すように、程度表現と形容動詞の共起には規則性が認められる<sup>14</sup>。

(16) Oを[完全に/\*相当に/\*かなり/\*少し][粉々/半熟/ぺちゃんこ]にVする

(17) Oを[??完全に/相当に/かなり/少し][きれい/平ら/濃厚]にVする

三原は、(16)に見られる極点制約について、結果句となり得る形容動詞が名詞の下位類であり、それ自体は意味的にスケールを内包しないことに起因すると論じている。すなわち、三原の分析では、結果句「粉々に」は「名詞+後置詞」と構造分析できる後置詞句(PP)ということになる<sup>15,16</sup>。本論では、形容動詞が「の」形容動詞と「な」形容動詞に分類されるという三原の分析を踏襲することにする。

さらに観察を進めると、「の」形容動詞と「な」形容動詞の間にはさらなる差異が存在することが分かる。まず第一に、両者は進行形の文脈の中で異なった解釈を示す。よく知られているように、日本語の進行形は行為の進行と状態の継続という2つの用法がある。例えば、「大きな絵が壁に描かれている」という文は、「絵が描かれる過程が進行している」ことに加えて、「描かれた絵が壁に存在している」という結果状態の解釈も持つ<sup>17</sup>。このような進行形の多義性を踏まえて次の例を見られたい。

(18) a. 僕は、太郎が花瓶を粉々に割っているところを訪ねた。

b. 僕は、太郎が卵を半熟に焼いているところを訪ねた。

(19) a. 僕は、太郎が部屋をきれいに掃除しているところを訪ねた。

b. 僕は、太郎がうどん粉を平らにのぼしているところを訪ねた。

(cf. 影山(2009: 119))

(18)の例では、行為が進行しているという解釈に加えて、その過程において、目的語で表される対象に、「に」

句で表される何らかの結果状態が出現しているという解釈が常に可能である。一方、(19)においてはそのような対象の結果状態に関する含意は明らかではない。例えば、(19a)については、「部屋をこれからきれいに掃除しようと掃除道具を準備しているところを訪ねた」という状況を容易に想像できる。

同様な対比は、次のような例からも確認できる。

(20) 花瓶を粉々に割って見せて欲しい。

(a) 割った花瓶を見せる (=粉々に割って、それを・・・) (結果)

(b) 花瓶を割る行為を見せる (過程)

(21) 部屋をきれいに掃除して見せて欲しい。

(a) \*きれいに掃除した部屋を見せる (結果)

(b) 部屋を掃除する行為を見せる (過程)

(21a)の非文法性は、「な」形容動詞「きれいに」がそれほど強く結果を含意しないことを示している。むしろ、「な」形容動詞は、結果句である以前に、少なくとも行為の過程に関する何らかの叙述を行う機能を持つと言える。その点で、「の」形容動詞とは明らかに異なり、両者を同一に扱うのは、やはり妥当とは言えない。

第二に、三原も指摘するように、「の」形容動詞は「な」形容動詞に比べて統語的独立性を有している。例えば、次の(22)と(23)が示すように、「の」形容動詞は擬似分裂文で焦点化できるが、「な」形容動詞は焦点化できない。

(22) a. 太郎が花瓶を割ったのは、[粉々に]だ。

b. 太郎が卵を焼いたのは、[半熟に]だ。

(23) a. \*太郎が部屋を掃除したのは、[きれいに]だ。

b. \*太郎がうどん粉をのぼしたのは、[平らに]だ。

同様の対比はいわゆる語順の「かき混ぜ」においても見られる<sup>18</sup>。

(24) a. [粉々に]太郎は花瓶を割った。

b. [半熟に]太郎は卵を焼いた。

(25) a. ??[きれいに]太郎は部屋を掃除した。

b. \*[平らに]太郎はうどん粉をのぼした。

(24)の文頭の「の」形容動詞は、動詞の表す行為の結果として適切に解釈可能であるが、それに対して(25)の「な」形容動詞は結果句として容認されない。したがって、(25a)の「きれいに」は様態の副詞としての解釈でのみ容認可能となり、(25b)の「平らに」は様態の解釈が認められないのでそもそも非文法的な文になってしまう<sup>19</sup>。以上の観察から、「の」形容動詞はそれ自体独立した構成素としての振る舞いを示すのに対して、「な」形容動詞は主動詞から切り離すと結果句としての資格を失うという一般化が得られる。

ところで、(9a)の「白く」のような形容詞のク形についてはどうであろうか。以下のデータを見る限りでは、「な」形容動詞と同様に扱えるように思われる。

(26) a. Oを[\*完全に/相当に/かなり/少し][冷たく/大きく]Vする

b. 僕は、太郎がスイカを冷たく冷やしているところを訪ねた。(過程の進行/?結果)

c. \*太郎がスイカを冷やしたのは、[冷たく]だ。/\*[冷たく]太郎はスイカを冷やした。

次節で「な」形容動詞に対して与えられる分析は形容詞のク形に対しても当てはまると思われるが、ここでは2種類の形容動詞の間に見られる非対称性の説明に焦点を当てて議論を進めていくことにする。

従来の接近法では、英語において論じられてきたような叙述関係に基づいた分析を、いわば翻訳的に日本語に対しても仮定するため、このような「の」形容動詞と「な」形容動詞の間の非対称性は、意味論的・語用論的な問題として取り扱われることになる。しかし、加藤(2007)が指摘するように、英語の結果構文は「構文」と呼べる特殊性を有していることが先行研究の知見により認められるが、日本語において同等の議論が成立しているとは言い難い。本論では、日英語間の最も根本的な類型論的差異である(非)膠着性に立ち返り、それぞれの言語の形態統語論から2種類の形容動詞の特性を導出する接近法を選択することにする。

### 3. 日本語の結果句の形態統語論

#### 3.1. 提案

本論は、「統語派生は意味構造を同時に構築し、語彙的特徴は構造特性に還元される」とする解釈意味論の立場に立ち、結果句の認可に関わる形態統語論を精査することによって、これまで語彙意味論もしくは語用論の枠組みで分析される傾向にあった日本語の結果構文に見られる個別的制約が自然に捉えられると主張する。特に、前節で紹介した三原(2008)の議論を踏襲し、AP型とPP型という結果句の分類を仮定した上で、次の(27)を提案する。

(27) a. 日本語の結果句は、形態統語的に動詞と複合述語を形成する。

b. 日本語の結果句は、第一義的には、動詞の表す行為の過程を修飾する副詞である。

以下、本論では、(27)の提案の妥当性について順に論じていく。まず最初に、主として(27a)に焦点を当てて議論を進め、その後(27b)の論証については3.3節で行うことにする。

#### 3.2. 言語の(非)膠着性と複合述語の形成

加藤(2007)において論じられているように、日本語における結果「構文」は独立した構文としての資格を有しているとは言い難い<sup>20</sup>。とりわけ重要な点は、1節で述べたように、英語とは対照的に、日本語においては形容詞補語による叙述関係の「継ぎ足し」が見られないことである。次の(28)を見られたい。

(28) a. \*髪が黒く。(cf. 髪を黒く染めた。)    b. \*床がピカピカに。(cf. 床をピカピカに拭いた。)

(28)の非文法性が示すように、形容詞のク形も形容動詞の二形も独立した述語としては機能しないが、これは、英語の結果構文に生じる形容詞補語とは対照的である。

(29) a. Her hair is black. (cf. She dyed her hair black.)

b. The floor is shiny. (cf. She wiped the floor shiny.)

この対比は、日英語の(非)膠着性に起因すると思われる。すなわち、英語においては、語は互いに独立性を保ちつつ構造関係を結んでおり、統語的制約を遵守し意味的に矛盾のない範囲で叙述関係を利用した言語形式が生産的に生成される。一方、日本語は膠着言語であり、文の構成要素は動詞に接続する形式をとる。よく知られているように、日本語には、「食べさせる/られる」といった態の転換をはじめとして生産的な複合述語を用いた言語形式の事例が見られる。本論では、膠着言語としての日本語において、結

果句は、英語における形容詞補語のように独立した二次述語として統語構造上に生起するのではなく、主動詞と複合述語を形成し得る統語連鎖を成すと論じる。以下では、そのような複合述語の形成を支持する独立した議論を紹介する。その後、Chomsky(2008)において論じられている統語構造のラベリング演算を用いて、複合述語形成の形態統語論について考察することにする。

本論は、膠着言語としての日本語の形態的特徴の観点から結果句の本質に接近しようとする試みであるが、形態的プロセスの有無と結果構文の成否との関連について体系的に説明しようとした研究として Snyder (1995, 2001) があげられる。

Snyder は、単一言語内における N-N 型複合名詞の生産性と形容詞結果句の有無の相関に着目し、N-N 型複合名詞を形成する過程を有する言語は、結果構文の生成に関わる動詞とゼロ形態素の形態統語論的合成が可能であると分析している。Snyder によると、複合語形成における形態合成のプロセスの有無(複合語パラメータ)によって、形容詞結果句の生成可否に関する言語多様性が予測されることになる。実際に、Snyder の分析はゲルマン諸語とロマンス諸語の対比を上手く捉えているように思われる<sup>21 22</sup>。

一方、日本語に目を転じてみると、日本語はかなり生産的に「名詞+(連用形)動詞」の形式の複合名詞を形成することが知られている。杉岡(1998)によれば、(30)に示されるように、日本語においては主動詞の内項のみならず付加詞的要素が編入した複合名詞が認められるが、英語においてそのような複合名詞は生成されない<sup>23 24</sup>。

- (30) a. 玉拾い, 手紙書き, ねじまき                      b. 黒こげ, 手作り, よちよち歩き  
 (31) a. pasta-maker, letter-writing                      b. \*fast-maker, \*hand-making (of clothes)

さらに、日本語には、「食べ物, 捨て猫, 落ち葉, 泣き顔」のように、英語では許されない「(連用形)動詞+名詞」という形態の複合語も存在する。このような複合名詞の形成に関する事実は、Snyder の議論に関連して2つのことを示唆する。第一に、英語は、形態的合成プロセスに関して、ロマンス諸語との比較においては一見すると高い生産性を有していると思われるが、日本語はさらに複合語の形成手段が豊かであり、その意味で、Snyder の分析は、さらに広範な通言語的データによる検証が必要である。しかし、第二に、Snyder の洞察が正しい限りにおいて、日本語においても(英語とは異なる様式での)生産的な結果構文の形成過程が存在することが予測される。この点において、言語の(非)膠着性から結果構文の形成に接近しようとする本論の分析と Snyder の議論は交わりを持つことになる。本論では、複合語パラメータは言語の(非)膠着性と密接に関連していると仮定し、日本語においては複合述語を形成する形態的なプロセスによって結果構文が生産的に生成されると論じる。それでは、具体的な結果句認可に関わる形態統語論について精査していくことにする。

### 3.3. 結果句に対する形態統語論的分析

#### 3.3.1. 結果句の選択性

まず、結果句が動詞と形態統語論的に複合述語を形成するという本論の主張は、結果句の分布が動詞と目的語との共起関係によって制限されることを予測するが、実際にその予測は成り立つ。

- (32) 太郎は床をピカピカに / ツヤツヤに / \*ヌルヌルに / \*デコボコに磨いた。

ここで、問題の共起関係は、単なる動詞と結果句の間の意味的一致関係ではなく、目的語も含めた動詞句内部の相互的な選択関係として捉えるべきものであることに注意されたい。

- (33) a. 太郎は磁器の花瓶をピカピカに / ツヤツヤに磨いた。



- b. 太郎は車をピカピカに / \* ツヤツヤに磨いた。  
 c. \* 太郎は土塀をきれいに磨いた。

(33a) は「ピカピカに」「ツヤツヤに」いずれの結果句が生起しても適格な文である。一方、(33b) では、「ツヤツヤに」という結果句が生起できないが、それは動詞自体との共起関係ではなく、目的語「車を」との選択関係に因る。(33c) においては、土塀は「きれいに」はなり得るが、通常は磨くものではないため、非文法的となっている。すなわち、「結果句と目的語」「動詞と目的語」という2つの選択関係は互いに独立しておらず、「結果句+動詞と目的語」という様相で絡み合っていると見える。同様な選択制限は英語においても観察される。Carrier and Randall (1992) や Boas (1993) らが指摘しているように、多くの結果構文において選択される結果述語はかなり制限されている。

- (34) a. He painted the house red/\*rusty/\*expensive.  
 b. He hammered the metal flat/smooth/\*safe/\*beautiful. (Green (1972: 84))

ここで、日英語の結果句に見られる選択制限の平行性から、英語と同様に形容詞補語を主要部とする小節分析が日本語にも当てはまると考えてしまうかもしれないが、そのような分析は妥当ではない<sup>25</sup>。なぜなら、上で指摘したように、日本語の結果句が形容詞補語として小節の主要部を成すという分析は、次のような例が文法的であることを誤って予測してしまうからである。

- (35) a. \* 花瓶がツヤツヤに(ある)。 b. \* 車がピカピカに(ある)。

(35) の非文法性は、形容詞のク形「黒く」と形容動詞の二形「ピカピカに」が、それ自体独立した補語として単独で述語となることも、また、状態・存在を表す動詞「ある」とも共起できないことを示す。この点で英語の結果句とは対照的である。

- (36) a. Her hair is black. (cf. She dyed her hair black.)  
 b. The floor is shiny. (cf. She wiped the floor shiny.)

それでは、日本語における結果句と目的語の間に見られる選択性はどこから生じるのであろうか。本論の分析においては、結果句は動詞と複合述語を形成するため、目的語は複合述語に選択されると見なされる。すなわち、日本語の結果句は、「述語の一部」を成すことで、目的語との選択関係を結んでいることになる<sup>26</sup>。以下では、結果句が統語構造上で動詞の補部を占めることを示した上で、そのような構造関係を基盤としてどのように複合述語が形成されるのかを具体的に論じることとする。

### 3.3.2. 動詞の補部としての結果句

英語の結果句の構造上の位置に関して、伝統的には、Kegl and Fellbaum (1988) では VP 付加と、McNully (1988) では V' に支配されていると論じられている<sup>27</sup>。一方、日本語の結果句に関しては、Takezawa (1993) や Koizumi (1994) において、後者の主張、すなわち動詞の補部として V' に支配されることを支持する証拠が提示されている<sup>28 29</sup>。

- (37) a. \* ジョンが車を真っ赤に 2 台塗った。  
 b. \* ジョンが子どもを立派に 3 人育てた。  
 (Takezawa (1993: 63))

「遊離数量詞は、それと共に解釈される名詞句の基底の位置を示す」という伝統的な診断法が正しい限りにおいて、(37)の非文法性は、目的語ではなく結果句の方が動詞に隣接した位置に生起することを示している。次に、代用形「そうする」による置換について観察されたい<sup>30</sup>。

- (38) 太郎は車をいつもきれいに磨いているが、次郎も・・・
- a. \*ピカピカにそうしている (soo-su= 目的語+動詞)
  - b. そうしている (soo-su= 目的語+結果句+動詞)
  - c. バイクを(いつも)そうしている (soo-su= 結果句+動詞)
  - d. \*バイクをピカピカにそうしている (soo-su= 動詞)

ここでも再び、結果句が動詞の補部として生起し、「結果句+動詞」が目的語を排除した独立の構成素を形成することが示される。

さらに、次の例が示すように、目的語に先行するか後続するかによって、「に」句の解釈には違いが生じる。

- (39) (先生は行進させるために) 1年生を3つのグループに振り分けた。
- a. 1年生だけから成る3つのグループを作った
  - b. もともとある(他学年の)3つのグループに1年生を振り分けた
- (40) (先生は行進させるために) 3つのグループに1年生を振り分けた。
- a. ?? 1年生だけから成る3つのグループを作った
  - b. もともとある(他学年の)3つのグループに1年生を振り分けた

目的語が「に」句に先行した場合は、動詞「振り分ける」が生産動詞として解釈される(39a)と、「に」句が着点として機能する与格構文としての解釈(39b)の間で多義的である。しかし、判断はやや微妙であるが、目的語と「に」句の位置を入れ替えた(40)においては与格構文の解釈が優勢であるように思われる。この事実もまた、日本語の結果句は主動詞に隣接して生起する分析を支持する証拠となる<sup>31</sup>。

ところで、本論は日本語の結果句を副詞類として分析するので、結果句が通常動詞句副詞と同様の分布を示すという予測がなされるかもしれない。しかし、以下の事実から、結果句は純粋な動詞句副詞とは異なる構造上の位置を占めると言える。

- (41) りきは小畑からの名前を出して見せたが、しばらく見つめた後、こんなもの、  
あたしは用はないわと言い、( ) ( ) 裂いてしまった。  
(室生犀星『あにいもうと』より)

劉・都(2010)によると、日本語母語話者90人に質問したところ、「静かに細かく」という結果句が様態副詞に後続する語順が自然と判断したのは76人(84%)で、「細かく静かに」という結果句が先行する語順に比べて、遥かに容認度が高い。次の(42)においても同様の事実が見られる。

- (42) a. 丁寧に部屋をきれいに掃除した。(cf. 部屋を丁寧にきれいに掃除した。)  
b. ??きれいに部屋を丁寧に掃除した。(cf. 部屋をきれいに丁寧に掃除した。)

(42b)は、「きれいに」が様態の副詞として解釈される場合にのみ容認可能であると思われる。

以上の事実から、日本語の結果句は統語構造上で主動詞に隣接した位置を占めていると結論づけられる。

ここで生じる疑問は、付加詞的要素であるはずの結果句がどうして主動詞に隣接して生起しなければならないかである。この問いに対して本論の提示する回答は、「動詞と結果句には複合述語を形成するために統語構造上の隣接性が要求される」というものである。以下では、Chomsky (2008) における構造構築の定式化を採用した上で、2 節で論じた AP 型 / PP 型という 2 種類の結果句それぞれに対して、どのように主動詞と結びついて複合述語を形成するのかを提示する。

### 3.3.3. 統語的併合におけるラベリング演算

Chomsky (2008) の構造構築原理に関して、本論において特に重要な点は次の (43) のように要約される。

(43) a. 構造構築は集合論によって概念化される<sup>32</sup>。

- b. H というラベルを持つ語彙項目  $\alpha$  と統語的対象物 (SO) である  $\beta$  が併合した場合、新たに形成される SO' は  $\{\alpha, \beta\}$  となる。その際、SO' のラベルは H で、 $\beta$  は  $\alpha$  の補部となる。
- c. H というラベルを持つ語彙項目  $\alpha$  と H' というラベルを持つ別の語彙項目  $\beta$  が、(語彙項目同士で) 併合した場合、ラベルが H/H' で多義的な  $\{\alpha, \beta\}$  が形成される。

(43b, c) は、2 項対立の構造構築において、語彙項目と SO を併合させる場合と、語彙項目同士を併合させる場合では、新たに形成される SO のラベルに差異が生じることを述べている<sup>33</sup>。この点について具体的な事例を用いて見てみよう。派生の段階で、既に SO である PP(in the room) が形成されているところに、語彙項目 V(sing) が心的辞書から導入されると、 $\{V, P\}$ 、すなわち sing in the room という句が形成される。この併合は、語彙項目 V の持つ統語素性 EF の要求により駆動される非対称的關係に基づくものである。したがって、新たに形成される句のラベルは V (すなわち動詞句) となる。一方、語彙項目同士の併合はどうであろうか。例えば、主要部末尾型言語である日本語における複合述語形成では、通常は後項動詞が主要部となる(「走り始める」「飛び上がる」など)。しかし、独立した議論として、松本 (2009) は、「込む」形の複合述語の語彙的性質を精査し、「覗き込む」「包み込む」「刈り込む」といった一部が左側主要部であることを指摘している。この事実も、(43c) の述べる通り、語彙項目同士の対称的併合においてはラベルが一義的に決定されない場合もあることを示している<sup>34 35 36</sup>。

それでは、日本語の結果句に立ち返ってみよう。上で観察したように、日本語の結果句は主動詞に隣接して生起するため、動詞と統語構造構築の第一段階で併合されると考えられる。PP 型の結果句の場合、それ自体が独立した SO としての資格を持つため、語彙項目である動詞との併合は非対称的となる。したがって、(43b) により、主動詞を主要部、PP 型結果句を補部とする動詞句が形成され、ラベルは V と一義的に定められる。ところが、AP 型結果句は、形容動詞の二形(もしくは形容詞のク形)であるため、それ自体は単独の語彙項目に過ぎない。したがって、(43c) により、主動詞との併合は対称的關係となり、両者から形成される SO のラベルは V/A で多義的になってしまう。

このように、日本語における 2 種類の結果句は共に主動詞に隣接して生起するが、その統語構造は大きく異なる。そして、前節で観察した、統語的操作の適用可能性に関する PP 型と AP 型の差異は直接的に導かれることになる。すなわち、PP 型結果句は、それ自体が独立した SO として主動詞の補部を占めるため、焦点化やかき混ぜ語順の適用を受けるのに対して、ラベルが定まっていない複合述語に含まれる AP 型結果句は、統語的操作のターゲットとなり得る独立した SO としての資格を有していないのである<sup>37</sup>。ここで、英語と同様の叙述關係に基づいた結果句の分析では、当該の対比は特別な規定なしには説明されないことに注意されたい。なぜなら、英語の結果構文においては AP 型結果句の移動が認められるからである。まず、Rizzi (1990) は、記述の二次述語とは異なり、結果句が WH 移動の適用を受けることを観察している<sup>38</sup>。

(44) a. \*How angry did you telephone?

- b. \*How raw did you eat the meat?  
 c. How flat did she hammer the metal?  
 (Rizzi (1990: 48))

さらに、McNulty (1988) は、動詞の行為から含意されやすい結果句 ( 本来的結果構文とほぼ同義 ) が WH 移動可能であることを指摘している<sup>39</sup>。

- (45) a. How dry did Bill wipe the dishes?  
 b. ?How flat did the gardener water the tulip?  
 (McNulty (1988: 161))

日本語の結果句が、AP 型 /PP 型を問わず一様に英語と並行的な小節構造を成しているとするれば、両者の移動可能性や日英語間の差異は、全く予測不可能となってしまう。一方、本論が想定する統語構造の下では、当該の事実は何ら特別に説明を要するものではなくなる<sup>40</sup>。

### 3.3.4. 複合述語としての [ 結果句 + 動詞 ]

ここで、日本語の動詞と結果句が複合述語を形成するという本論の主張について、その一般性を通言語的観点からもう少し考えてみたい。本論の主張に対する、「PP 型の結果句は、統語構造上で動詞の補部であるに過ぎず、形態論において複合述語を形成しているとは言い難い」との批判は当然想定できる。一方、AP 型結果句についても、「AP の類が主動詞と語彙的に併合する現象が通言語的に見られるのか」といった疑問が生じるかもしれない。

独立した議論として、Koster (1993) は、オランダ語の動詞句の構造に関する考察から次の (46) の一般化を導き出している。

- (46) 動詞の補部は、その動詞の項もしくは述語の一部である。

また、Farkas (2006), Kwon and Zribi-Hertz (2006), Booji (2009) は、いわゆる擬似編入が、基本的に動詞句内部で動詞をターゲットとしたものに限られることを観察している<sup>41</sup>。その中で、前置詞句や副詞と動詞 ( 過去分詞形 ) がまとまって統語操作の適用を受けている次の事例を見られたい。

- (47) a. [Bei ihren Eltern gewohnt] hat Silke damals, als sie klein war.  
 b. [Offen gesprochen] haben wir niemals.

擬似編入に見られる形態的自立性と統語的構成素性の問題は、形態論・音韻論と統語論の間の対応関係をどのように理論化するかということであり、現時点では研究の進展を待たねばならない。しかし、少なくともここでは、本論で主張する PP 型結果句と主動詞の複合述語分析が、(46) の一般化や (47) のような他言語における言語現象と同列に捉えられる可能性があるということを強調したい。また、同様の議論は、AP 型結果句の形態統語論についても当てはまる。副詞が動詞と語彙的に併合している事例は数多く観察されている<sup>42</sup>。例えば、Rivero (1992) は、ギリシア語において、様態の副詞と動詞の間の編入現象がかなり生産的であることを指摘している<sup>43</sup>。

以上の考察から、本論において主張する日本語の結果句と動詞の複合述語分析は、統語構造構築に課せられる独立した制約から直接的に導き出されるという点で説明的に妥当であるばかりではなく、通言語的に一般性の高い言語現象の文脈の中で日本語の結果句について再考察する道を開くという意味で、記述的

妥当性が高く、したがって、類型論的考察の観点から見ても望ましいと言える。次節では、PP型/AP型それぞれの意味的・語用論的特性について、本節で提示した形態統語的分析との整合性を踏まえつつ考察しながら、日本語における結果句の副詞性について論じることとする。

#### 4. 結果句の副詞性

本節では、日本語の結果句は、機能的には副詞として動詞の表す行為の過程を修飾することを論じる。先行研究においても、日本語の結果句の副詞性については、仁田(2002)、加藤(2007)、井本(2009)等によって論じられてきた。いずれの議論においても、日本語の結果句は、いわゆる本来的結果構文における行為の結果の表出を指定するのみであると仮定されている。しかし、1節で指摘したように、結果状態への到達を含意する達成動詞が日本語に存在するかは疑わしい。

- (48) a. 割っても割れない花瓶  
 b. この靴はいくら磨いてもきれいにならない。  
 c. この肉はいくら煮ても柔らかくならない。

むしろ、日本語の動詞の意味において結果が必ずしも含意されないことを勘案すると、これまで本来的結果構文と呼ばれてきたものは、実は「本来的」とは言えないのではないかという疑問が生じる。

このような日本語の動詞の意味特性に関連して、三原(2009b)は、結果句と共起する動詞の類が日英語で異なることを指摘している。Levin and Rappaport Hovav(1995)等が観察しているように、英語のAP型結果構文には継続動詞(49)と瞬間動詞(50)の双方が用いられるが、(51)が示すようにPP型結果構文には継続動詞のみが生起する<sup>44</sup>。

- (49) a. The gardener watered the tulip flat.  
 b. We heated the coffee hot.  
 (50) a. Ma pats the bag smooth.  
 b. Last night, the dog poked me awake every hour to go outside.  
 (51) a. Mary bullied John into leaving.  
 b. The professor talked us into a stupor.  
 (三原(2009a: 460-461))

一方、日本語においては、「切る/壊す/割る」といった破壊動詞を用いた例を除くと、瞬間動詞に比べて継続動詞と結果句の高い親和性を示す例が圧倒的に多い。この日英語の対比は、両言語における結果句の認可に関する差異を示唆しているように思われる。すなわち、本論が主張するように、日本語の結果句が、動詞と複合述語を成すことで統語形態的に直接結びつき、その動詞が表す行為を修飾する副詞的要素として認可されるとすれば、行為の過程がより強く含意される継続動詞との親和性の高さは、容易に予測されることになる<sup>45</sup>。そして、日本語において、動詞による結果到達の含意が結果句の認可に関する必須条件ではなく、むしろ、結果状態の表出を導く行為の過程の存在が決定的なのである。その意味において、日本語には「本来的」結果構文は存在しないわけで、(48)のような例は全くジレンマとはならない。以下では、日本語の結果句が動詞の行為と結びつく副詞的要素であると考えた妥当性について、さらに支持証拠を提示し、同時に先に示したAP型とPP型の非対称性についても考察する。

上で指摘したように日本語において破壊動詞は結果句と結びつくが、英語においては、(52)が示すように同様の事例は非文法的である。

- (52) a. \*Harry destroyed the car into bits.  
 b. \*The builders destroyed the warehouse flat.  
 (米山・加賀 (2001: 159))

このような特定の類の動詞と結果句の共起関係に関する日英語の差異は、生産動詞においても観察される。次の具体例を見られたい。

- (53) a. 山田さんは家を立派に建てた。  
 b. 太郎は少女の絵をかわいく描いた。  
 (54) a. \*Graham Bell invented the telephone useful.  
 b. \*He created a drama famous.  
 (米山・加賀 (2001: 159))

先行研究においては、英語の破壊動詞と生産動詞が結果構文に生起できないことは、行為を被る対象の「存在」との関連でたびたび説明されている。すなわち、破壊動詞であれば「行為の結果状態の出現時点」、生産動詞であれば「行為の開始時点」において、行為を被る対象が眼前には存在しない。例えば、車が破壊された後には車は残存し得ないし、電話の発明の第一段階では電話自体は世に存在していない。その結果として、構造的叙述関係と意味関係が一致しないことになり排除される。しかし、対応する日本語の例が文法的であることを勘案すると、そのような説明は一般性を持つとは言えない。一方、本論の分析においては、日本語の結果句は動詞の行為の過程を修飾する副詞的要素であるのみで、行為を被る対象の「存在」は言及される必要がない。破壊動詞の例「街を粉々に破壊する」であれば、「破壊活動が進行する過程で粉々にされた建物が次第に街を覆っていく」という解釈を本論の分析は正しく予測できる。同様に、(55)が示すように、生産の過程の様態を修飾し得る形容動詞の二形のみが生産動詞「建てる」と共起できることも、本論の分析から直接的に導ける<sup>46,47</sup>。

- (55) a. 家を立派に /?? 豪華に /\* きらびやかに建てた。  
 b. 家の建て方が立派だ /?? 豪華だ /\* きらびやかだ。

上で述べたように、日本語の結果句が行為の過程を修飾する副詞であるとする、日本語の結果構文は「本来的」とは呼べず、むしろ全て「派生的」ということになる。先行研究において排除されてきた以下のような例の容認性からも、そのことは支持される<sup>48</sup>。

- (56) ソテーするために、ヒレ肉の塊を平らに叩いた。  
 (57) a. ヒレ肉を10分の間 /\* 10分で叩いた。  
 b. ヒレ肉を10分で /\* 10分の間 平らに叩いた。

1節で指摘したように、(56)において、結果状態を含意しない行為動詞「叩く」が、「平らに」と共起することによって結果構文を形成していることは、(57)に示されるような「平らに」によるアスペクト転換の事実から確認できる。このような「派生的」結果構文は、主動詞・目的語・結果句の間の意味的選択関係が適切である限りにおいて何ら問題ない。したがって、次のような例を用いて、日本語に「派生的」結果構文が存在しないと結論づけることはそもそもできない。

- (58) \*ダイヤモンドを平らに叩いた。

この文の非文法性は、ダイヤモンドが平らにならないという現実世界の常識に基づく語用論的問題に過ぎない。「派生的」結果構文についてもう少し観察を進めてみると、日本語の結果構文の成立条件がさらに明らかになるように思われる。1節であげた次の例を再び見られたい。

- (59) a. 太郎は次郎の背中を/\*次郎をアザだらけに殴った。  
 b. 「せっかくセットしたんだから、ペチャンコに叩くのはやめて！」

(59)の「派生的」結果構文において、行為の影響性を被る対象の性質が結果構文の成立に関わっているということに注意されたい。次郎全体をアザだらけにすることは現実的ではないが、次郎の背中をアザだらけにすることも、セットした頭(髪)をペチャンコにすることも、容易に想像可能である。すなわち、行為を被る対象の領域が「限定的」である場合に結果構文が成立するということである。

この観察は、Dowty (1991)における漸次的対象 (incremental theme) や Tenny (1994)におけるアスペクト限定 (aspectual delimitedness) といった概念を想起させる。ここでは、三原 (2004)における「完全消費条件」という語を借用することにする。これは、「本を読む」という非限界の行為が限界点を持つようにアスペクト転換される場合に、対象である「本」に完全消費的な解釈が要求されるという条件である。三原は、行為に限界点をもたらす目的語(ここでは「本を」)を項限定詞と呼ぶ。この観点から日本語の結果構文を改めて見てみると、「動詞の行為を被る対象が項限定詞として機能し、完全消費条件が満たされる限りにおいて、本来的には行為を表す(すなわち限界性を持たない)動詞に対するアスペクト転換が生じる」と一般化できる。対象が項限定詞として機能する場合、行為がその対象の有する限定的領域に全体的影響を及ぼし、結果句は完全消費が達成される終結点 (terminus) を示すことになる<sup>49</sup>。このような議論を踏まえ、結果構文に関して伝統的に論じられてきた「本来的」対「派生的」の対立はもはや存在せず、日本語の結果構文は全て「派生的」であることを、ここで改めて強調したい<sup>50</sup>。

それでは、2節で観察した「の」形容動詞によるPP型結果句と「な」形容動詞によるAP型結果句の非対称性について、改めて考察したい。PP型とAP型の非対称性は次の(61)のようにまとめられる。

- (60) a. PP型結果句はスケールの極点を示すが、AP型結果句にそのような制約は課されない。  
 b. PP型結果句では、行為の中間段階における結果状態の(部分的)表出が見られるが、AP型結果句はそのような解釈を必ずしも含意しない。  
 c. PP型結果句は統語的に自立し動詞と切り離すことができるが、AP型結果句は統語的に動詞に依存する。

まず、PP型結果句の特性は、日本語の「に」PPの主要部である後置詞「に」が、原義的に「存在」を表すことと深く結びついている<sup>51</sup>。すなわち、結果句が動詞の行為の過程を漸次的に修飾する副詞的機能を持つことと、後置詞「に」の持つ「存在」の意味特性の相互作用により、後置詞「に」の補部名詞句によって表される結果状態が、行為の進行に沿って漸次的に表出することになる。一方、AP型は、一般的な副詞的要素と同様に主動詞の行為を修飾するのみで、結果状態の段階的な出現についてはそれ自体では何ら含意しない<sup>52</sup>。最後に、(60c)について、結果状態の表出に関するPP型結果句とAP型結果句の違いという意味的観点も考慮した上で再考したい。

- (61) a. [粉々に] 太郎は花瓶を割った。  
 b. [半熟に] 太郎は卵を焼いた。  
 (62) a. ?[きれいに] 太郎は部屋を掃除した。

b. \*[平らに] 太郎はうどん粉をのぼした。

PP型結果句がかき混ぜ操作により文頭に生じた(61)は適格であるのに対して、(62)が示すようにAP型結果句は動詞と切り離すことができない。しかし、(62a)において、「きれいに」が様態の副詞として解釈される場合は完全に文法的になることに注意されたい。当該の対比はあくまで結果句としての認可において生じるのである。PP型結果句は、前節で論じたように、形態統語的に動詞から独立しているだけでなく、それ自体が「結果状態の存在」を含意するという意味的独立性も同時に獲得している。一方、AP型結果句は、形態統語的に主動詞に依存する構造関係においてのみ結果状態を含意でき、動詞と切り離されると通常の動詞句副詞としてしか認められないと言える。このように、前節で提案した形態統語的分析と、本節で論じた副詞的分析を組み合わせることで、PP型結果句とAP型結果句の非対称的な振る舞いは自然に説明されるのである。

## 5. 結論

本論における議論をまとめることにする。まず、日英語の類型論的差異の観点から、英語において認められる結果「構文」は日本語には存在しないことを主張した。また、先行研究の伝統に反して、日本語の結果句を「本来的」対「派生的」という対立的パラダイムの中で捉えることが妥当ではないことを論じた。次に、三原(2008)に従い、形容動詞の二形は、PP型とAP型に分類されると仮定し、両者の間の統語的・意味的な非対称性について観察した。その上で、Chomsky(2008)において提示されている統語構造構築に関わるラベリング演算を採用することによって、PP型とAP型の形態統語的性質の差異には、両者の統語的独立性が決定的に関与していることを示した。最後に、意味論的議論として、日本語の結果句が主動詞の行為の過程を修飾する副詞的要素であると仮定し、独立して認められている動詞句のアスペクト転換の仕組みによって、行為の過程から結果状態の出現が原理的に導出できることを論じた。本論は、英語の分析を翻訳的に取り入れることで日本語を分析する風潮に異議を唱え、日本語の類型論的性質に基づいて記述的妥当性と説明的妥当性の両立を目指すことの重要性を改めて問う事例研究と言える。

最後に、結果構文が通言語的に見てかなり慣用的表現形式であることと、日本語においても結果句の認可にはかなり厳しい意味論的・語用論的な制約が関与していることは、見落とすべきではない重要な事実である。本論で提案した複合述語形成に関する形態統語的分析が、日本語(を含む膠着言語)における「構文」の成立・慣用的表現の形成の過程にどのような帰結をもたらすのかについては、非常に興味深い問題であるので、今後の研究課題とし稿を改めて考察したい。

## 注

1 構文文法(Goldberg(1995))の意味での「構文」とは、統語的・意味的特性が語彙の合成性から導出できない言語単位のことを指す。本論は、実際の運用における言語表現の固定化・慣用化については認めるものの、「言語表現の合成的な生成」という理論言語学の伝統的な仮説を前提として議論を進める。ただし、本文中では、慣例により「構文」という用語を用いることにする。

2 (2a)における自動詞 freeze は、主語の意味役割が「主題」である非対格動詞であることに注意されたい。非対格動詞の表層の主語が基底では直接目的語であるという「非対格仮説」の下では、結果述語は、常に内項にあたる直接目的語と叙述関係により認可されることになる。詳細な議論については、Simpson(1983)やLevin and Rappaport Hovav(1995)を参照されたい。

3 意味的な近似性はあるが、形容動詞の二形「真っ白に」と形容詞のク形「白く」とは形態統語的に別個に扱う必要がある。両者の意味的・統語的特性については2.2節を見られたい。

4 複合述語を用いた「叩き潰す/のぼす」の文法性との比較については、先行研究においてたびたび指摘されてきた。確かに、本論でも以下で論じるように、膠着言語である日本語では複合述語が生産的に用いられるが、通言語的比較における一般化は、叙述関係と複合述語の対立という文脈のみで捉えることはできない。例えば中国語においては、複合述語の形成と叙述関係が共に関与していると考えられる。

(i) 張三 打死了 李四 (張三が殴って、李四が死んだ)

5 「ジョンはクタクタに踊った」も同様に非文法的である。

6 Washio(1997)における「強い」結果構文と「弱い」結果構文の対立とほぼ同義と考えてよい。



7 英語においては、(7)や(8)に対応する例は、いずれも非文法的となることに注意されたい。

(i) a. \*John broke the vase into pieces, but it wasn't broken.

b. \*The waiter wiped the table clean for two minutes.

8 例えば、この問題に関して、Croft (1990) は、意味的基準に基づく通言語的な比較可能性を論じている。

9 影山 (2001) の議論においては、結果句と結果様態の副詞の区別が必要であると指摘されているのみで、結果句自体の述語性を示す(副詞性を否定する)根拠は何らあげられていない。

10 擬似結果構文(Washio (1997))に対しても、以下で提示する本論の分析は拡張可能であると思われるが、ここでは詳細な検討はせず、稿を改めて考察したい。結果句の副詞性と擬似結果構文の関連については、井本(2009)と宮腰(2009)を参照されたい。

11 長谷川(1999)や三原(2009b)などにおいて、日本語の結果構文の統語構造が提案されているが、いずれの分析においても、形態的特性の統語構造における反映に関して十分な考察は見られない。

12 英語においては、*She dressed elegantly.*のように判断が微妙な例もあるが、基本的に指向性と様態は明確に区別される。次の対比を見られたい。

(i) a. \*John danced happy, although he wasn't happy.

b. John danced happily, although he wasn't happy.

英語の二次述語と副詞は形態的に区別されるため、本文(13)におけるような曖昧性は生じない。

13 スケールと結果構文の関係については、Vanden Wyngaerd(2001)、小野(2007)、三原(2009)を、また、形容詞のスケール構造については Kennedy and McNally(2005)を、それぞれ参照されたい。

14 「半熟に」の「半」は、英語の half の用法と平行的に、一定の極点を示すと考えられる(cf. 三原(2009a))。

15 三原(2009a)によると、PP型結果句は、経路の存在と単一状態への到達を含意する。

16 三原(2009a)の分析では、形容詞のク形による結果句は、あくまで形容詞句(AP)であり、限界動詞の表す行為の結果状態について記述するのみであるとされる。したがって、それ自体のスケール構造は結果構文成立の可否に影響を与えないことになる。本論は、形容詞のク形と「な」形容動詞は品詞的にも機能的にも副詞類であり、「の」形容動詞は品詞的には後置詞句であるが機能的には副詞類であると主張する。

17 前者は事象叙述文、後者は属性叙述文として解釈される。

18 本論では、直接議論に関わらないため、かき混ぜ現象の詳細な分析には立ち入らないことにし、基底生成分析ではなく伝統的な移動分析を仮定することにする。もし前者の立場に従えば、本文中の(24)と(25)の対比は、付加詞の統語構造上の分布と解釈の相関として扱われるであろう。その場合も、なぜ当該の対比が生じるのかは依然として問題となる。

19 Jackendoff (1977) 以来、英語における様態の副詞は動詞句副詞として分類され、いわゆる S の領域には生起しにくいことが観察されている。

(i) (?Quickly) John (quickly) rewrote the report (quickly).

しかし、子細に事例を検討すると、事実はそれほど単純ではない。(i)における文頭の quickly はやや容認度が落ちる程度だが、次の(ii)に見られる completely は文頭には決して生じないことから、completely の類いの副詞はさらに下位分類されなければならない。

(ii) (\*Completely) John (completely) rewrote the report (completely).

副詞の統語的分布が意味的特性と関わっていることは次の例からも分かる。

(iii) a. Carefully John rewrote the paper. (subject-oriented/\*manner)

b. John rewrote the paper carefully. (manner/\*subject-oriented)

日本語の結果句を副詞的要素として分析する本論にとって、他言語の副詞類と通言語的に比較・検討することが今後の課題であるのは言うまでもない。

20 日本語における結果句の慣用化と「構文」の関係については、今後の研究課題とし、稿を改めて考察したい。

21 ロマンズ諸語とゲルマン諸語の結果構文に関する類型論については齊木・鷲尾(2009)などを参照されたい。

22 Snyder の分析が日本語に適用されるかについては批判がある(影山(2009)など)。本論は、「複合語パラメータ」という Snyder の洞察自体は基本的に正しいものとし議論を進める。

23 日本語では「野田おろし」のような「固有名詞+連用形(動詞)」の複合名詞も存在する。

24 (30b)の例は、日本語の語形成において、結果・手段・様態を表す付加詞が主動詞に編入することを示す例であり、結果句と動詞が複合述語を形成すると主張する本論にとってとりわけ重要である。

25 小節の詳細な構造については本論の議論と直接関わりがないので、ここでは立ち入らないことにする。伝統的に、語彙範疇自体が小節を構成するという分析(Stowell (1983))と、語彙範疇を選択する機能範疇が小節の主要部を成すという分析(Hornstein and Lightfoot (1987))の対立がある。

26 日本語の結果句が「述語の一部」とであるという洞察は、分析の枠組みは異なるが、黒田・李(2007)における共述語分析(co-predication analysis)にも見られる。

27 Kegl and Feilbaum (1988)や McNully (1988)においては伝統的な X' 理論に基づく統語構造が仮定されている。現在の理論の枠組みでは、中間/最大投射という概念も付加という構造構築規則も存在しないため、それぞれの主張は「 $\text{CP}$ もしくは VP の周縁(edge)に外的併合される」、「主動詞に外的併合される」と述べ直される。

28 Koizumi (1994)においては、次のような動詞句前置の適用可能性から、結果句は主動詞と構成要素を成すと結論づけられている。

(i) a. [車を黄色く塗りさえ]、ジョンがした。

b. \*[車を塗りさえ]、ジョンが黄色くした。

(Koizumi (1994: 54))

29 Chomsky (2008)に従うと、補部とは、「統語構造に導入された語彙項目  $\alpha$  の持つ統語素性(EF)を局所的に満足させる

統語的対象物(SO)」と定義され、典型的には、語彙的主要部に派生の第一段階で外的併合されるSOになる。

30 代用形「そうする」を動詞句の構成素性に関する診断法として詳細に検討したのは、管見では影山(1993)が最初である。影山が「そうする」に対して[V'ADV+V]という構造を仮定している点は特に興味深い。

31 (39)と(40)の対比が、結果を表す「に」句と着点を表す「に」句の構造上の位置の違いを示唆することに注意されたい。同様の観察はTakezawa(1993)においてもなされている。

(i) a. ジョンがトムにメアリーを新しいヒロインに推薦した。

b. \*ジョンが新しいヒロインにメアリーをトムに推薦した。

(Takezawa (1993: 62))

この文法性の対比は、結果句「新しいヒロインに」が、着点「トムに」に後続し、従って主動詞により近い構造上の位置を占めることを示している。

32 Chomsky (1995)以降の極小主義理論においては、狭義の統語論において語順は決定されないと仮定される(cf. Kayne (1994))。また、伝統的なX'理論における意味での「投射」は概念的な地位を完全に失っていることにも注意されたい。

33 語彙項目同士の併合は対称的な関係であるのに対して、語彙項目と統語的対象物の併合においては、前者に対する後者の非対称的併合と捉えられている。

34 複合語形成が文法上のどの部門の問題であるかは別として、日本語において句レベルでの左側主要部の存在を示す事象は管見では見当たらない。

35 日本語における複合語形成の諸問題については、影山(1993)、影山・由本(1997)、伊藤・杉岡(2002)等を参照されたい。

36 日本語の語形成における主要部の問題、とりわけ外心構造の合成語については、影山(2009)を参照されたい。

37 かつて「中間投射レベルに対しての統語操作」や「形態的緊密性の原理」として説明されていた事例に対して一般化が可能かもしれない。

38 Hoshi (1992)は、(意味的条件が満たされれば)目的語指向の記述の二次述語の中にもWH移動可能な例があることを指摘している。

(i) How rare did John eat the meat? (Hoshi (1992: 2))

記述の二次述部の認可には、結果句の場合とは異なる原理が働いていると考えられるため、本論ではこの問題には立ち入らないことにする。

39 影山(2009)は、結果句に対する統語操作の適用が意味論的・語用論的要因によって決定されると論じている。影山によると、派生的結果構文の結果句は、主動詞の意味からの「予測可能性」が低いため、統語操作によって主動詞から引き離すことができないことになる。

40 (44c)や(45a)のような英語の例においては、小節の移動が関与していると考えられる。

41 擬似編入とは、形態的には独立した別個の要素が統語的には単体を成しているという現象であり、多くの場合が動詞とその補部要素との間に見られ、外項が動詞に擬似編入されているような事例は見られない。

42 3.2節で示した「黒こげ」等の複合名詞形成も同種の現象と言えるかもしれない。

43 次の対比は、英語においても様態の副詞と動詞が単一の構成素を形成している証拠と言えるかもしれない。

(i) a. John completely finished the coffee, and Mary the ice cream.

b. \*John completely finished the coffee, and Mary, partially the ice cream.

(Wexler and Culicover (1980: 292))

44 瞬間動詞が生起する場合は、常に「繰り返し動作」の解釈が要求される。

45 英語においては破壊動詞や生産動詞は結果構文を形成しないため、ここでも日英語は大きく異なる。この点については後で立ち返ることにする。

46 破壊動詞の例においても、結果状態のみを表す結果句は許されない。(i)において、「瓦礫の山」は破壊活動の終了時点でのみ生じる。

(i) \*街を瓦礫の山に破壊した。

47 結果句を行為の過程の修飾要素とする本論の分析にとって、生産動詞である「刺身を大きく切る」の例は明らかな問題となるかもしれない。なぜなら、「大きく」は行為の過程を修飾しているのではなく、切られた刺身の結果状態を叙述しているように思われるからである。本論と同様に結果句を副詞類として分析する先行研究においても同様に問題であり、例えば、「PRODUCTに対する言及」(加藤(2007))や、「事象のタイプシフト」(井本(2009))といった概念による説明が試みられてきた。ここでは、今後の課題とし深く立ち入らないことにして、(i)のように、「大きく」が動作の過程に関わる程度副詞としても機能することを指摘するに留める。

(i) 阿部が打った球はセンターの頭を大きく越えていった。

48 本論における以下の議論を、北原(2009)における「スケール構造」の議論と比較・検討することは今後の課題とする。

49 本論の分析は、Rothstein (2004)の意味における「事象の頂点性(culmination)」の概念によって定式化されるかもしれない。50 「本来的」対「派生的」という対立が、動詞の語用論から得られる記述的「傾向」を示していることは認められる。結果構文における核から周縁への拡張可能性や類型論的考察については今後の研究課題としたい。

51 「に」句と英語の前置詞to/intoとの比較に関しては先行研究において多くの分析・言及が見られる。その中で、影山(2005)は、前者を「静的場所」、後者を「動的事象」という概念で区別している。三原(2009a)は「に」句について、基本的には「方向」を示し、着点指向動詞と共起する場合には「存在」の意味も持つと論じている。北原(2009)は「に」句を非段階的な意味特性を持つPlacePと分析している。

52 AP型において結果状態の表出が含意されるのは、動詞・結果句・対象の語用論的な要因が相互作用する場合のみであると考えられる。

53 日本語における慣用句において、「動詞+内項」の組み合わせが圧倒的に多数であることを勘案すると、日本語における「構文」とは「述部として表される言語表現の慣用化」として捉えられるかもしれない。

## 参考文献

- Boas, Hans (2003) *A Constructional Approach to Resultatives*. CSLI.
- Booji, Geert E. (2008) "Pseudo Incorporation in Dutch," *Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik* 46: 3-26.
- Carrier, Jill and Janet Randall. (1992) "The Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives," *Linguistic Inquiry* 23: 173-234.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," In Robert Freiden, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta (eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean Roger Vergnaud*, 133-166. MIT Press.
- Croft, William (1990) *Typology and Universals*. Cambridge University Press.
- Farkas, Donka (2006) "The Unmarked Determiner," In Vogeleer, Svetlana and Liliane Tasmowski (eds.), *Non-Definiteness and Plurality*, 81-106. John Benjamins.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions*. University of Chicago Press.
- Green, Georgia (1972) "Some Observations on the Syntax and Semantics of Instrumental Verbs," *Proceedings of CLS* 8: 83-97.
- 長谷川信子 (1999) 『生成日本語学入門』大修館書店
- Hornstein, Norbert and David Lightfoot (1987) "Predication and PRO," *Language* 63: 23-52.
- Hoshi Hidehito (1992) "Circumstantial Predicates, PRO, and D-structure Adjunction," *English Linguistics* 9: 1-20.
- 井本亮 (2009) 「日本語結果構文における限定と強制」小野尚之 (編) 267-314. ひつじ書房
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』研究社
- Jackendoff, Ray (1977) *X'-Syntax: A Study of Phrase Structure*. MIT Press.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (2001) 「副詞と二次述語」影山太郎 (編) 『日英語対照 動詞の意味と構文』260-292. 大修館書店
- Kageyama, Taro (2005) "Why English Motion Verbs are Special," 『形態・意味・統語を包括する統語的語彙理論の構築』(平成14年度一平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書), 29-44.
- 影山太郎 (2009a) 「語彙情報と結果述語のタイポロジー」小野尚之 (編) 101-140. ひつじ書房
- 影山太郎 (2009b) 「外心構造における意味と形態のミスマッチ — 太っ腹タイプの形容詞」由本陽子・岸本秀樹 (編) 25-46. くろしお出版
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』研究社
- 加藤敏三 (2007) 「日本語結果述語は動作オプション表現である」小野尚之 (編) 217-248. ひつじ書房
- Kayne, Richard (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. MIT Press.
- Kegl, Judy and Christiane Fellbaum (1988) "Non-canonical Argument Identification," *Cognitive Science Laboratory Report* 25: 187-203. Princeton University.
- Kennedy, Christopher and Louise McNully (2005) "Scale Structure, Degree Modification, and the Semantics of Gradable Predicates," *Language* 81: 345-380.
- 北原博雄 (2009) 「動詞の語彙概念構造と「に」句のスケール構造・統語構造に基づいた、着点構文と結果構文の平行性」小野尚之 (編) 315-364. ひつじ書房
- Koizumi, Masatoshi (1994) "Secondary Predicates," *Journal of East Asian Linguistics* 3: 25-79.
- Koster, Jan (1993) "Predicate Incorporation and the Word Order in Dutch," Ms., University of Groningen.
- 黒田航・李在鎭 (2007) 「Pattern Matching Analysis (PMA) を用いた日本語の結果構文の共述語分析」小野尚之 (編) 249-288. ひつじ書房
- Kwon, Song-Nim and Anne Zribi-Hertz (2006) "Bare Objects in Korean," In Vogeleer, Svetlana and Liliane Tasmowski (eds.), *Non-Definiteness and Plurality*, 107-132. John Benjamins.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.
- 松本曜 (2009) 「複合述語「～込む」「～去る」「～出す」と語彙的複合述語のタイプ」由本陽子・岸本秀樹 (編) 175-194. くろしお出版
- McNulty, Elaine (1988) *The Syntax of Adjunct Predicates*. PhD dissertation, University of Connecticut.
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』松柏社
- 三原健一 (2008) 「いわゆるナ形容詞の結果述語を巡って」金子良明・菊池朗・高橋大厚・小川芳樹・島越郎 (編) 『言語研究の現在 — 形式と意味のインターフェイス』99-114. 開拓社
- 三原健一 (2009a) 「方向と存在の文法」由本陽子・岸本秀樹 (編) 455-472. くろしお出版
- 三原健一 (2009b) 「スケール構造から見る結果構文」小野尚之 (編) 141-170. ひつじ書房
- 宮腰幸一 (2009) 「日英語の周辺の結果構文 — 類型論的含意」小野尚之 (編) 217-266. ひつじ書房
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 小野尚之 (編) (2007) 『結果構文研究の新視点』ひつじ書房
- 小野尚之 (編) (2009) 『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房
- Rivero, M.L. (1992) "Adverb Incorporation and the Syntax of Adverbs in Modern Greek," *Linguistic and Philosophy* 15: 289-331.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*. MIT Press.
- Rothstein, Susan (1983) *The Syntactic Forms of Predication*. PhD dissertation, MIT.
- Rothstein, Susan (2004) *Structuring Events*. Blackwell.
- 劉丹青・都恩珍 (2010) 「情態修飾成分についての考察 — 修飾成分に対する再分類という観点から」『桜花学園大学人文学部 研究紀要』12: 77-93.
- 齊木美和世・鷲尾龍一 (2009) 「言語の類型と結果表現の類型 — いくつかの残された問題」小野尚之 (編) 43-100. ひつじ書房
- Simpson, Jane (1983) "Resultatives," In Lori Levin, Malka Rappaport, and Annie Zaenen (eds.), *Papers in Lexical Functional Grammar*,

143-157. Indiana University.

Snyder, William (1995) "A Neo-Davidsonian Approach to Resultatives, Particles, and Datives," *Proceedings of NELS 25*: 457-471.

Snyder, William (2001) "On the Nature of Syntactic Variation: Evidence from Complex Predicates and Complex Word Formation," *Language 77*: 324-342.

Stowell, Timothy (1983) "Subjects, Specifiers, and X-bar Theory," *The Linguistic Review 2*: 285-312.

杉岡洋子 (1998) 「動詞の意味構造と付加詞表現の投射」井上和子(編)『研究報告2 先端的言語理論の構築とその多角的な実証』341-363. 神田外語大学

Takami, Ken-ichi (1999) "Unaccusativity and the Resultative Constructions in English and Japanese," 井上和子(編)『研究報告3 先端的言語理論の構築とその多角的な実証』145-182. 神田外語大学

Takezawa, Koichi (1993) "Secondary Predication and Locative/Goal Phrases," In Hasegawa Nobuko (ed.), *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, Kuroshio Publishers.

Vanden Wyngaerd, Guido (2001) "Measuring events," *Language 77-1*: 61-90.

Washio, Ryuichi (1997) "Resultatives, compositionality, and language variation," *Journal of East Asian Linguistics 6*: 1-49.

Wexler, Kenneth and Peter Culicover. (1980) *Formal Principles of Language Acquisition*. MIT Press.

米山三明・加賀信広 (2001) 『語の意味と意味役割』研究社

由本陽子・岸本秀樹(編) (2009) 『語彙の意味と文法』くろしお出版